

白氏文集 三十六 長恨歌（六）

加藤淳平

道士は仙界の蓬萊宮に、曾て楊貴妃なりし仙女に會ふを得て、貴妃身邊の小物と傳言を託せらる。斯くて長恨歌、彼の「在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝 天長地久有時盡 此恨綿綿無盡期」の四句を以て終る。

長恨歌（六）

長恨歌（六）

・・・・・（四行略）

含情凝睇謝君王

情を含み 睇を凝らし 君王に謝す

一別音容兩渺茫

一別すれば 音容兩つながら渺茫

昭陽殿中恩愛絕

昭陽殿中 恩愛絶え

蓬萊宮中日月長

蓬萊宮中 日月長し

迴頭下望人寰處

頭を廻らし 下に人寰を望む處

不見長安見塵霧

長安を見ず 塵霧を見る

唯將舊物表深情

唯舊物を將て 深情を表はさん

鈿合金釵寄將去

鈿合 金釵 寄せて將て去らしめん

釵留一股合一扇

釵は一股を留め 合は一扇

釵擘黃金合分鈿

釵は黃金を擘き 合は鈿を分く

但教心似金鈿堅

但心をして 金鈿の堅きに似しむれば

天上人間會相見

天上人間 會ず相見ん

臨別慇懃重寄詞

別れに臨んで 慇懃に重ねて詞を寄す

詞中有誓兩心知

詞の中に誓ひあり 兩つの心は知る

七月七日長生殿

七月七日 長生殿

夜間無人私語時

夜間人無く 私語せし時

在天願作比翼鳥

天に在りては 願はくは比翼の鳥となり

在地願爲連理枝

地に在りては 願はくは連理の枝たらん

天長地久有時盡

天長く 地久しく 時ありて盡くるも

此恨綿綿無盡期

此の恨 綿綿として 盡くる期無からん

（大意）（仙女は、曾ての楊貴妃在世中の虹の色の衣装を纏った天女の舞さながらに奥から降りて来て、春の雨に濡れる梨の花のやうに涙を流し）心を籠めて使者の道士を見つめながら、帝に感謝して申し上げるに「お別れしてからはお姿もご消息も遠くなりました。あの昭陽殿中のご寵愛も遠い過去のものとなり、ここ仙界の蓬萊宮では月日の經つのが遅遅として居ります。頭を廻して下の人間世界を見ようとしても長安は見えず、塵の霧が立ち込めるばかりです。ただ昔の物で陛下への深い心を表したいと存じます。この螺鈿の小匣と金の釵をお持歸り下さい。釵は金を二つに割き、小匣は蓋と箱の二つに分け、片方をこちらに留めます。心を金や螺鈿のやうに堅く保つならば、天上と人間世界に別れていてもいつか必ずお會ひできませう」。別れに當り、貴妃は更に慇懃に重ねて、帝に言葉を寄せた。「七月七日の七夕の夜、宮中の長生殿に誰も居ない時、帝は私だけにお誓ひ下さいました。何世を生れ替つても、天であれば翼を並べて飛ぶ鳥、地にあれば

繫った二つの枝にならうと。これは陛下と私だけのことでございました。天は長く地は久しくともいつか盡きる日が来るだらう。しかし戀の恨みはいつまでも盡きる時が無い。

(平成三十年十月十三日受附)